

農山村の教育効果と地域づくり-都市部中学校の体験学習の受け入れを通して-

山形県の内陸北部に位置する農山村、角川の里では連休明けから田植えにかけての季節が一年間でもっとも緑が美しい。山里の大きな魅力の一つである山菜もこの時期が豊富であり、もっともおいしい季節でもある。

この時期に仙台の中学2年生の1泊2日や2泊3日までの体験旅行の受け入れが行われた。全部で5校の受け入れを行い10日間にわたって続けて角川の里で体験学習をしたわけである。角川では地元の小中学校と連携した体験学習は常日頃行われているわけだが、都市部の中学校の体験学習の受け入れとなれば普段の活動とはやはり異なるところが出てくる。一番異なるのは、子ども達の数が多いこと。角川中学校は全校生徒併せても30名程だが、仙台からの中学生は2年生だけでも100名から170名までと桁が違う。こうした大人数の子ども達を集落の体験活動に受け入れていくのは、準備が必要だという点で苦労もあるが、一方でかなり楽しいものだという点にも気がつかされる。集落の共同活動、とりわけ里地里山の保全活動や農業活動は、より多くの人たちが参加し、みなでワイワイ行うのが醍醐味だからだろう。

今回の一連の受け入れプログラムで行ったのは、里山の間伐体験、ビオトープづくり、田植え、畑の苗植え、炭焼き体験、地域環境調査、里山散策道の整備、保全看板の設置、郷土料理教室など普段の活動プログラムと同じものだ。子ども達を複数の班に細かく分けて角川地区の全域で行った。10名前後に編成された班ごとに3、4名のガイド（地元のおじいちゃんやおばあちゃん、おじさん、おばさん達だ）がついて、集落のあちらこちらみんなで一日活動をする。人数が多い分だけその成果が夕方までには確実に見えてくる。里山がきれいになったり、ビオトープに木道がかかったり、畑が耕され、田植えができあがる。その成果は目に見える形で表れ、大きな達成感を感じることができるのである。子ども達は、都会では経験のできない里の野外活動に興味津々だ。ガイドも普段何気なく行っている山仕事や野良仕事に関心を寄せる子ども達を相手にして、自らのもつ技術に改めて誇りを感じたようだ。ホームステイ先でも徐々に多くの子ども達が泊まりにぎやかさを取り戻したことで、楽しい団欒が行われた。角川の里のホームステイでは、食事についても何も特別なことをせず郷土料理が出される。しかし都市部の子ども達にとってはそれが特別なもの。食べ物一つ一つを質問しながら珍しそうに食べる光景を各家で見ることができた。

もっとも大きな地元との違いは、都市部の子ども達や引率の先生達と地元住民との意識の違いだ。特に学校の先生達にとって、刻々と変化する天候や里の自然、農業カレンダー、地域住民の動きなどにあわせ、現場で臨機応変にプログラムを調整・変更していく里の野外活動の流儀は、慣れないものである。計画がきちんと立てられた教室での授業やコースがきちんと決まった社会見学とはかなり異なるものだったということだろう。子ども達にとっても、自分から周りを見て考えて積極的にかかわっていかないと十分に体験学習を進めることができないという点で、楽しい反面、戸惑うこともあったのではないかと思う。地元の住民も日常的な活動であるため特別に説明せずにすすめてしまう傾向もある。

今後、都市部の学校と、農山村住民相互で情報交流を行いながら、事前学習のカリキュラムを整備したり、外部者や子ども達にも分かりやすいプログラムを工夫したり、活動の丁寧な解説を行うなどのコミュニケーションをより充実していく必要があるだろう。表面上の心と心の交流に加えて、里での学びがより一層磨きをかけて深いところまで都市部の子ども達に伝わるのが大切だ。こうした交流と学習の努力の積み重ねが今後の農山村と都市部をつなぐ本当の意味での東北の地域づくりに発展するのではないかと思う。